明治37年と41年のクマに出会った話　清井菊太

『共立百年史　清井家開拓の歩み』からの抜粋

（略）明治35年までに下川沿東１線で、６町１反の畑の開拓に成功した。翌36年、今の日吉に通い始め（略）

私は12歳（明治37年）、父と２人で日吉に通っていました。忘れられない思い出と言えば、寝泊まりするための、笹を束にして並べ、小さな棒で押さえながら、その上にまた笹を重ねて造ったおがみ小屋での生活のある日、夜になるとクマがオオーン・オオーンといって近寄ってきて、私たちを驚かせたのです。父は包丁を、私はまさかりを持ち、父から「もしクマが入ってきたらこれでなぐれ！」と言われました。

こんな日が何日も続き、ある時は水汲みのために置いてあったガンガンの中に棒を入れてガラガラと大きな音をたててクマを遠ざけたこともありました。本当にあの時は怖かった。

この小屋は寝泊まりするだけのものだったので、仕事が早く終われば共立まで歩いて帰ります。その帰り道なども18号線まで歩いて帰ると日が沈み、暗い中からクマと何回も出会ったものです。しかし、心配はいりません。この辺のクマは決して人間を襲わず、逆にこちらがワーッと大きな声を張り上げれば逃げていったのです。

クマの話はまだあります。私が16歳（明治41年）の時のこと。弟と２人で田中善二郎さんが住んでいたところを50間ほど上がったところへ山ブドウを取りに出かけたのです。大きな風倒木があるそばにブドウがたくさんなっており、ちょうど霜が降りた後だったので、揺すぶるだけでブドウが落ちてきました。夢中になって拾っているその時、大きなクマが私と弟の前にオオーッと立ったのです。腰が抜けるほどでした。すぐさま坂道を必死で走りました。弟に早く逃げれと言ったのに、弟は「こんな時にそんなに慌てるものでない」と言うのです。「そんな馬鹿なことを言っていないで早く来い」と怒鳴ったのですが、クマもその時、反対方向へ逃げていったのです。きっと私たちが木を揺すぶっていた時に、おいしいブドウをクマがたらふく食べて眠っていたところを驚かせてしまったのです。

それにしても弟のあのひょうきんな顔を思い出すたびに笑い出してしまいます、（略）

＊注：清井菊太さんの父親、清井茂太さんが入植したのは明治31年。

この年、菊太さんは６歳。

＊熊と出会った場所は、文の流れから日吉地区と思われます。